

初の試み「語学ゼミナール・オンライン 2020」について (T. Tsutsui) [J]

今年の語学ゼミナールは、8月31日(月)～9月3日(木)の日程で開催された。ただし会場は、ここ数年で慣例となった多摩永山情報教育センターでもコープイン京都でもなく、自宅や研究室であった。新型コロナウイルス感染症の蔓延とそれに伴う緊急事態宣言の発令を受けて、予定されていた招待講師の来日が困難とみなされたことで、現地開催の中止を余儀なくされたためである。そこで今年は、代替企画としてオンラインによる研究発表会を催し、会員はもとより、とりわけ若手研究者の参加を促す研究交流の場を設けることとなった。招待講演を依頼していた Daniel Hole 先生(シュトゥットガルト大学)には、「ドイツ語の状態を表す場所格交替と項交替における主題役割が導き出す束縛 (Die stativ Lokativalternation des Deutschen und theta-induzierte Bindung in Argumentalternationen)」というテーマで基調講演を快諾いただき、日本時間午後4時、ドイツ時間午前9時に、初のオンラインによる語学ゼミナールが幕を開けた。

例年、実行委員による語学ゼミナールの打ち合わせは、春季学会の会場校の教室で、また、ゼミナール当日に施設のロビーや食堂を利用して行われてきた。実行委員が各地に散らばっているため、当然それ以外のやりとりはメールが主流となるが、それでも、この2回の打ち合わせは「対面」という点で意思疎通がより図り易い・・・と少なくとも私は考えていた。しかし、今年はその口頭での打ち合わせを、遠隔会議ツール Zoom を利用して「非対面」で行ったのだが、結果として、何ひとつ不便のない打ち合わせになったと思われる。もちろんその理由は、打ち合わせに至るまでに、とりわけ実行委員長によるゼミナール全体像の綿密な把握と、検討すべき議題の正確な整理がなされていたことにあると考えられるが、この点は、教室であれ、ロビーや食堂であれ変わらぬことである。そのため、少なくとも今回の代替企画に関しては、オンラインによる打ち合わせにより十分に意思疎通を図ることができるとわかった。そもそも、実行委員が各地に散らばっているからこそ「遠隔」のツールが有意義となるのであり、そのうえで今回は、普段の授業などを通してか実行委員がみな Zoom の扱いに慣れていたこともスムーズな打ち合わせを導いた理由であろう。

さて、今年のプログラムには異例な点がいくつかあるが、とくに開始時間について言及したい。例年どおり3泊4日(?)で開かれた当ゼミナールであったが、その4日間はいずれも16時に開始された。従来であれば、2日目と3日目の招待講師による講演と、最終日のワークショップがいずれも午前9時半から行われていたが、Hole先生をはじめとする時差のある地域からの参加者の存在をふまえ、4日間すべてドイツ時間の9時から始めることとした。これが功を奏して、実際にドイツ滞在の学生の参加を可能にし、また、ドイツ以外に台湾からの参加者を得たことも、オンラインによる遠隔方式でこそその利点であったと言える。また、今年、初日に会長のご挨拶をいただいたのだが、これもオンライン開催ゆえの

賜物であろう。プログラムは、初日に基調講演が、2日目以降にはすべて研究発表が組まれた。Zoomによる発表ということで、発表申込数の減少が危惧されたものの、蓋を開ければ参加者37名と研究発表10本を擁し、例年の現地開催と遜色のない盛況のゼミナールとなった。しかも、参加者の3分の1にあたる12名が若手研究者（内5名が発表者）であり、そのうち8名が大学院生であった。さらには1名の学部生の参加も見られた。この点では、代替企画として掲げられた、若手研究者に対する研究交流の場の提供という当初の目的を達成したと考えられる。また、Hole先生は、10本すべての研究発表に対して質問やコメントをくださり、とくに若手研究者の発表については、メール等を通して個別にアドバイスを約束されるといった場面もあった。

一貫してZoomで行われた基調講演と研究発表であったが、幸いにも今回は、想定された不具合は何ひとつ起こらなかったと言える。講演や発表のハンドアウトは、予めあるいは事後に語学ゼミナール専用Webサイトにアップするという形を取り、発表の最中はZoomの「画面共有」を利用して参加者全員で視聴した。質疑応答では当初、Zoomの「手を挙げる」機能を利用することも考えられていたが、「反応」ボタンとの混同が見られたこともあり、また、ビデオ（顔出し）がONの者は画面内で実際に手を挙げることで問題なく司会者に変わることがわかったため、挙手機能の使用は皆無であった。さらには、質問者が自らミュートを解除して、口頭で„Darf ich fragen?“のように申し出てもまったく音声的な妨げにはならず、同時に質問が被って進行が困難になるといった事態も生じなかった。しいて言えば、いくつかの研究発表で、少し声が聞こえにくかったり、多少ハウリングを起こしたりする場面もあったが、司会者や参加者の誰かが「もう少し大きな声で！」や「スピーカーの環境を調節して！」と促すことで即座に解決した。また、ネットワークに負荷がかかり音声途切れるといった問題もあったが、任意としていたビデオのON/OFFを参加者全員がOFFにするという対処によって発表が長く中断されることが回避された。オンラインによる非対面方式では、参加者間の譲り合いや協同がいかほど大切であるかをあらためて知った。ちなみに、事前に説明はなかったにもかかわらず、「反応」ボタンの「拍手」が講演や発表後などに称賛をおくる場面でこぞって使用されていた。これも、いわば暗黙の協同と言えるかもしれない。一方、発表者の側からは、現地開催と異なり、参加者の表情をうかがいつ場の空気を肌で感じられないのは、若干発表のやりづらさにつながるという声もあったが、同時に、たとえそうであっても、自らの発表に対して参加者からフィードバックを得られた今回のオンラインゼミナールは、コロナ禍でほとんど外部との接触のなかった研究の日々において、とてもありがたい場であったという意見を耳にすることができた。さらに、例年ゼミナール終了後に実施してきた参加者に対するアンケート（今回はGoogleフォームを利用）においても、オンラインでの実施に関して非常に多くの肯定的な感想を得ることができたのは嬉しい限りである。また、恒例となった会の模様の写真や参加者の集合写真は、パソコンの「スクリーンショット」で撮影し、後日、語学ゼミナール専用Webサイトにアップすることと

した。なお、サーバの利用についても述べておきたい。本来、契約がない場合 Zoom には時間的あるいは物理的な使用制限が課せられる。しかし今回は、実行委員長の所属である東京外国語大学が、たとえ学外での利用であっても教育・研究目的であればサーバの利用を許可するという非常に寛容な対応を取ってくださった。このことも、今回のオンライン開催を成功裡に導いた所以である。ここに謝意を表したい。

最後に、もうひとつ特筆すべきことがある。例年、現地で開かれてきた「夜の部」についてである。自由参加のその夜会では、毎年適度にお酒を酌み交わしつつ、教員や研究員、大学院生たちが、自らの研究や教育について話し合うだけでなく、身近な日々の生活に関してなど様々な情報を交換する。とりわけ発表者にとっては、発表での質疑応答とは異なり、肩の力を抜いてざっくばらんに意見交換のできる貴重な場である。しかし、今回はなんと言ってもオンライン開催である。果たしてそのような情報交換会を難なく行うことは可能であろうか。一度、試しと称して2日目の夜に有志が集って見たものの、音声がかぶってしまうことを避けるため、どうしても特定の者が会話を先導する必要があり、他の者は、話題を振られた者同士の会話に耳を傾け続けるしかないという具合となった。また、そのような状況であるがゆえになおさら、とりわけ今回初めての参加者や比較的若い世代の者たちにとっては、空気を読んで会話に割って入るといのは至難の業であったため、やはりなかなか現地開催のようにはいかなかった。言ってみれば、ひとつの宴会場に20名ほどが集ったうえで、隣の者と気ままに話し合うことができないといった状態である。たとえば、Zoom のチャット機能を利用して、個別に対話(?)を行えばよいという考えもあるかもしれないが、それでは、せっかく顔を突き合わせて(実際には突き合わせてはいないが)ことばを交わすことのできる機会の意味がない。せめて、いくつかの個室に分かれて少人数で話ができれば、音声の重複問題は依然残るものの、それでも会話への参加の自由度は相当に上がると考えられた。そこで登場した案が、Zoom の「ブレイクアウトセッション」である。グループワークを最大の目的としたこの機能は、まさに「個室」を作るにうってつけであった。しかし、ここでも注意を要する。たとえば、ホストによって複数のセッション(ルーム)が設定され、それぞれのルームに特定の人数が振り分けられたとして、一旦そのように配置されたメンバーは、それぞれのルームから他のルームへの自由な入退出ができないという難題と向き合わねばならない。言ってみれば、居酒屋の個室から個室への移動ができず、終始同じメンバーとしか会話ができないということである。これでは、せっかく多くの大学・機関から、普段はあまり話す機会のない人たちが集まっている意味がない。そうして出された最終案が、夜会参加者全員を「共同ホスト」にするというものであった。お酒が絡むとなぜに人はこれほど熱くなれるのかと思うほどの妙案である。仮に、いずれかのルームのメンバーが全員ほかのルームに移動したとして、いわば空室となったそのセッションは、むしろ、密談“を行うに最適なルームとして使用可能という秘策である。ドイツ語学に携わる日本の研究団体が、Zoom にこのような利用価値を生み出すなど、Zoom の開発者は想像できたであろう

か。最終日のドイツ時間 11 時に始まった夜会では、Hole 先生が、朝方タンクシュテレで購入した缶ビールを手にされ、ここにこと„Frühstücksbier“を堪能されていたのが喜ばしい記憶となった。

こうして初の試みとなった「語学ゼミナール・オンライン 2020」であったが、これまで微力ながら 11 年間実行委員に携わらせていただいた者として、個人的には、例年に劣らず非常に意義深いゼミナールであったのではないかと思う。毎年、このようなゼミナールの恩恵を受けられるのも、ひとえに招待講師の先生をはじめ、参加者の皆さま、実行委員の皆さま、そして本企画を支えてくださる DAAD や学会関係のすべての方々の御厚意にほかならない。この場をお借りして心からの感謝を申し上げたい。来年の語学ゼミナールがどのような形で開催されるかはまだ誰にもわからない。仮に再びオンライン開催になったとすればコロナの終息が見込めなかったということであり、正直なところ非常に複雑な思いを抱かざるをえない。ただ、「ウィズコロナ」に順応しながら、語学ゼミナールもそのあり方が問われ続けるとすれば、この点において、今回の代替企画は、今後オンラインによるゼミナール開催の可能性を探るうえで、ひとつの好例となったことに疑いの余地はない。

・・・と偉そうに綴っているが、今年をもって私は実行委員の役目を終え、新たな庶務に職を引き継がせていただいた。そして、稚拙ながらもなんとかコラムの草稿を書き終えた今、自分へのご褒美に、人生初の試みとして明日„Frühstücksbier“をとほくそ笑んでいる。

筒井 友弥（京都外国語大学）